

## 特別講演1 伝えるのは命 つなぐのは命

坂東 元

旭山動物園 園長

動物園が果たすべき役割は種の保存や、生物多様性保全等についての教育・普及などさまざまですが、その大前提として私たち飼育展示係が具体化しなければいけない目標は、来園者に、ヒトの生き方を基準にするのではなく多様な生き方があること、動物たちのすごさやかけがえのなさを感じてもらうこと、たくさんの命に囲まれている居心地の良さを感じてもらうこと、だと考えています。そのためには展示している動物たちが「生き生きとしていること」が大前提です。それはその動物が例えばチンパンジーがチンパンジーとして一生を過ごせるように飼育をすること、これは施設を考える際にも日常の飼育でも常に最優先に考えなければいけないことです。観てもらうのは「生活の営み」つまり生きていく命を観てもらいたいし、命をとおして伝えることが大切なのだと考えています。動物は、自分がすごい能力を持っていると思っているわけではありませんから、私たちがその「すごい」を見つけて、そのすごい能力を発揮できるように工夫をし、飼育下だから初めて可能なアングルや距離で観てもらえるように日々努力しています。

最近、「今の人気の原点はどこにあったと考えますか」とよく聞かれます。思い返して考えると、ほんの20年前まで旭山は時代に取り残されたような、動物を見られるだけで価値があった頃のまの狭い檻の中で、動物を飼育していました。来園者はライオンやヒョウが寝ていると「つまらない」から石や食べ物を投げ入れる、傘でつつく、大きな音を出してビックリさせる、など日常茶飯事でした。僕たちは自分の大切なものをけなされているようで、すごく悔しい思いをしていました。でも施設はどうしようもありませんでした。せめてもの思いでガイドを行うなど展示方法の古さを口で補ったり、手作りで看板を作ったりしてどうにかして姿形の奥にあるすごさ、素晴らしさを伝えようと努力をしていました。でもよく考えてみると、ライオンは寝ることも特徴的な習性であり能力です。その特徴を発揮している「寝

ている姿」がつまらなく見える、このことは動物を観てもらったための動物園が絶対にしてはいけない見せ方なのではないかと、むしろこのままではやめてしまった方がいいのではないかと思います。再整備が決まったとき、ライオンやヒョウにいかにも気持ちよく昼寝をさせるか、そしてその姿を来園者に気持ちよく感じてもらえるかをテーマに考え「もうじゅう館」を建てました。この「もうじゅう館」の成功が以後のペンギン館、オランウータン舎、ほっきょくぐま館、あざらし館、チンパンジーの森、オオカミの森などにつながっています。

旭山動物園には「珍しい動物」はいません。どんな動物も等しく自然の中で生きていてみんなすごい能力を持ち素晴らしい生き物たちです。絶滅危惧種、希少種だから価値があるわけではありません。むしろ今は普通の動物たちの素晴らしさを伝えることが、未来を考えると大切なことだと考えています。コアラがなんだ！ラッコがなんだ！負けず嫌いなところがあって「今に見ている」とずっと思っていたのも事実です。しかし「伝える側」があたかも動物の価値に差があるような見せ方をすれば、絶対にはいけないと思います。さらに「つまらない」ではいけないと痛切に感じています。いかに素晴らしい取り組みを行っていても、対象が「つまらない」ものに対する興味は先につながらないし、取り組みも評価されません。

「ありのまま」に素晴らしさを感じ価値を見つけ、自然の大切さに気づいてもらうこと、そして大切なものを守るのは人間の習性です。そのことが実現できたら、きっと今とは違う未来が見えてくるはずですが、ヒトだけではなく地球上すべての生き物が共生できる未来のために動物園ができることは何か？常に自問自答を忘れてはいけないと考えています。